

東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川地形名の 偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論

安 部 清 哉

1. はじめに

本稿は、去る2001年8月18日（土）に開催された、韓国日本学会（KAJA）第63回学術大会（大韓民国大邱市・慶北大学校）において、「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」という題目で発表した際に、会場にて配布した地図資料である。地図は、紙幅の関係で掲載できなかったため、ここに報告し、補論を付す（〔付記〕参照）。（発表内容（本文）は、そのProceedings — 安部（2001・8・18）（補注1）を参照されたい。）

2. 朝鮮半島における「東アジア中央気候線」の位置

本研究では、特に、方言境界線としての「気候線」の、朝鮮半島における位置を確認することが目的でもあったので、韓国にて発表を行ったものである。

以前、安部（1999）「日本列島におけるもう一つの方言気候線“気候線”」（『玉藻』35）で、「東アジア中央気候線」を提示したが、東アジア半島部（朝鮮半島）におけるその位置は未確定のまま空白であった。その後、朝鮮半島における古代の河川地形名の境界を、金 芳漢氏（1983）の研究から見出すことができた。さらに、その位置は、方言分布境界線・気候区分・文化圏境界線と重なっていることを確認することができた。河川地形名の分布境界が、方言（言語）分布境界線と重なり、さらにそれが、気候区分、及び、その他の種々の文化圏境界線と重なることになるのは、安部（1999）の日本語・中国語に次ぐもので、これら東アジア地域で共通しているということになる（さらに、後述の「南ユーラシア」にも共通する）。

なお、朝鮮半島における気候線の位置が、安部（1999）で示した日本と中国の気候線の延長線の位置よりもやや北寄りになっている（図4参照）。推定ではあるが、おそらく暖流の影響であろうと現在考えている。

3. 東アジアの「音韻対応」の言語的背景

「東アジア中央気候線」は、今回示したように（図6～8参照）、いわゆる東アジア地域のみではなく、西はインド西部まで及んでいると考えられる。

また、今回発表で示したように、東アジア中央気候線を間に挟んだ南北地域において、共通の言語的背景があると（仮に）するならば、その南北の言語（なり方言）において、その共通言語を背景として、その上に「音韻対応」（最新のもの安部・工藤香寿美（2000）付載のもの参照）が成立し得ることがわかる。このことによって、安部（1999）で示した「音韻対応」が、この気候線の南北言語（方言）間において成り立つ可能性があることを——あくまでまだ可能性としての段階ではあるが——明示できたと考える。（この共通言語背景を提示することなしに「音韻対応」の表の説明をしても意味をなさないだろう。これで保留していたその音韻対応表の説明にもどることができる。）

4. 「オーストロ・ユーラシア」文化圏研究

本資料に地図を挙げた「類別詞」の分布（図7）が、特に南ユーラシア地域に偏在する理由・背景は、現在のところ、本論以外の解釈は見られないようである。

また、国内・海外の文化人類学的研究においても、この「南ユーラシア」ないし「モンスーン・アジア」の研究は、まだほとんど行われていないのではないかとと思われる（注1）。つまり、今回示したような諸特徴の分布の重なりということそのものが——それが単なる偶然かそれとも有意なものかどうかという問題も含め——ほとんどまったく新しい問題ということになる。

また、発表の方でも取り上げた文化圏境界線「チンリンーホワイ線（秦嶺山脈—淮河線）」（「気候線」と重なる）は、中国では、その名称はともかく、漢代から知られている文化圏境界線のようなものである（陳 正祥1982）。しかし、日本の一般的研究書や啓蒙的歴史書ではほとんどその名を見ない（中国関係歴史専門書・論文は未詳であるが、国内出版物ではようやく2000年刊行のものに一冊見出したのみ）（補注2）。

著名な「照葉樹林文化論」も、この内側にある一部の範囲が対象であり、しかも、その照葉樹林帯が、ほぼ現在の範囲まで拡大・形成を完成させたのも、おそよ今から8000年～4000年前頃という比較的新しい時期が推定されているものである。

発表で述べたことの繰り返しになるが、世界的に見ても、河川地形名・言語特徴（の一部）（類別詞）、及び、気候区分（モンスーン・アジア）・降水量（夏季降水量100mm線——夏でも水が一定量以上得られるということの意味する）・栽培主食植物（芋）・食物

保存技術文化（麴発酵酒）・動物分布区分（東洋区）・大型哺乳動物（虎の本来的生息地域）などの、文化的指標でもある種々の分布領域（一部の地図は後日公表予定）が、ほぼ一様に重複しているという領域は、「モンスーン・アジア」というこの「南ユーラシア」（注2）領域以外には、現在見出すことができない（注3）。それだけでも、世界的規模で見て、極めて特異な領域であると見なすことができるであろう（注4）。

今後、このような新しい、しかも広域の問題を取り上げ、研究を進めるためには、次のような研究環境が必要と考えている。

- I この地域に共通の分布をもつ基本的現象の、既研究成果からの発見と公表（補注3）
- II Iを基礎として、国際的学際的に、良質な調査・資料収集・分析
- III 「南ユーラシア」「モンスーン・アジア」研究のような新領域への認知
- IV 言語学に限定して言えば、「南ユーラシア言語地図」のような広域言語地図作成（注5）

問題は、近年のグローバル化による文化的均質化の速度が急激であるために、伝統的データの「消滅」の速度が、「証明」に必要な時間に勝る勢いであることである。そのような状況を考慮すると——先を急ぎ過ぎると受け取られるであろうが——基礎的データの調査・収集が国際的に一層急がれ（注5）、そのためにも長期的視野での研究計画が求められてくる、と考えている。

ご意見・ご批判をいただければ幸いです（seiya@edu.ferris.ac.jp）。

5. 補論—アイヌ語における河川地形名の重層

発表においては、紙幅の関係で、アイヌ語における河川地形名（ナイとベツ）とその重層性の問題には言及しなかったのですが、ここに補足しておく。

仮に、河川地形名ナイ（祖形*nahdi）が、本発表のような背景をもつ可能性があるとする、アイヌ語に関しては、次のような問題に波及することになる。

- ①アイヌ語にある河川地形名ナイの分布範囲をもって、ただちに「現アイヌ語」が話されていた範囲と断定することはできない。
- ②広く分布するナイが古く、現アイヌ語のベツは、新しい可能性が高い。
- ③ナイとベツの重層性から推定すると、アイヌ語は、それら意味的に極めて近い2つの河川地形名を内部に持つに至る、広義での何らかの重層的言語形成要因をもった可能性が疑われる。

なお、①②に関して補足すれば、むしろベツの段階以降に現アイヌ語に近づいた（なった）と見ることができるとする場合には、千島列島北辺まで広がっているベツの分布範囲の方が考慮されることになる。

②の点では、城野光一（1996）「アイヌ語地名に見られる古い層と新しい層」（『言語学林 1995-1996』三省堂）の結論と異なる。異なることになる理由は、おそらく、城野氏の解釈が、アイヌ語の分布する範囲内のみを対象として、周囲論的解釈を適用しているためと考えられる。周囲論的解釈では、その言語分布範囲とそこでの伝播の中心地を指定することになるが、ナイ（またベツも）をアイヌ語のみの固有単語と見做し（韓国語のことは触れているが）、伝播の中心地を最終的に北海道内（の日高地方）と見たところに、ある種の制約（前提）があることがわかる。

③の重層性の可能性については、あべせいや（1997）『日本語のルーツを探ったら』（アリス館、2刷94頁）でも異なる観点から言及したことがある。ここでは、それを河川地形名という点から補った。（言語史を、成層（重層）論的視点から見ていくことについては安部（2001予定）も参照されたい。）

注

- (1) 「モンスーン・アジア」は、気候学以外では、このごく数年、比較的新しい段階の農耕である稲作との関係で取り上げられることがある程度である。
- (2) この新しい地域を呼ぶ特定の呼称は特に見出せない。気候学の「モンスーン・アジア」があるが（吉野正敏1999）、モンスーンに限らない問題であること、「アジア」の範囲が既に様々な使用されていること、南太平洋もモンスーンの領域であることなどを考慮し、「南ユーラシア」（Austronesia & Austro Eurasia=Austro-Eurasia）と当面呼んでおくことにしたい。
- (3) 北側［サハリン～沿海州付近］には多少のcline＝連続変異勾配（ふれ幅）がある。
- (4) それぞれの分布形成時期と過程がどうであったかは今後明らかにしていかなければならない課題である。
- (5) 言語学の領域に関して言えば、現在進行中の科学研究費補助金による特定領域研究「危機言語」研究の期間と規模が、継続・拡大されることを望むものである。

補注

（補注1）安部（2001・8・18）で、ギリヤーク語として挙げた河川地形名naluhは、（口頭では補足したが）注記が落ちている。金 芳漢（1985）に挙げられている、ギリヤーク語における、2つの論文による語形「*palu*（*naluh）～*nállu*（湾・河口）」による。中世韓国語にも、津・河口の意味での $nara$ も指摘されている。

（補注2）「チンリンーホワイ線」については、以前、安部（1999）で「成都ー淮河線」と仮称しているので補足する。この境界線は、安部（1999）において、日本語方言境界線の大陸側への延長線として見出し、「成都ー淮河線」としてその地図（本稿図4）に書き入れていた。その後、陳正祥（1982）、ついで『図解地図資料 三訂版』（1999、帝国書院）によって、ほぼ同様の気候上の境界線を指して「チンリンーホワイ線」という名称があることを知った。拙論は、言語（方言・河川地形名）の境界線をもととして文化的諸特徴を含めて名付けたものであり、位置的にも「成都ー淮河線」がわかりやすいように思われるが、同様のものに2つの名称は混乱を来すであろうし、中国では既に定着している名称のようであるので（国内ではまだあまり見ないが）、中

国内部分の境界線を指す場合には、以後これに合わせておきたい。

なお、図8にあるように、動物（植物）分布境界線として、「津軽海峡－ブラキストン線」と「七島灘－渡瀬線」があるが、中国・朝鮮半島・日本列島に連続する「東アジア中央気候線」は、これらとは異なってその中間にある。これまで気候学以外の分野ではまったく気付かれていない、新たな境界線として位置付け得ると考える（安部（1999）参照）。

また、図6－①②、図7に示したように、「モンスーンアジア」「南ユーラシア」のインド西部からの境界線は、図8の東洋界と古北界との境界線とも途中まで重複しながら、これらの境界線よりもより北側を、沿海州北部から樺太（サハリン）北辺まで及んでいると見ることができる。この新たな境界線についても、これらとは別の名称を与える必要があるであろう（北上するに従って、上記3本の境界線を含め、少なくとも合計4本の漸移層があると見るべきであろう）。その点については、今回、4章で未提示の分布地図とも併せて、機会を改めて取り上げることにしたい。

（補注3）図6－①・図7に示した「南ユーラシア」の範囲が、何らかの「言語層staratum」の範囲を——誤まらず——示しているなら、その北辺にあたる、河川地形名*nahdiが共通するギリヤーク語・アイヌ語・韓国語に近接している言語、例えば、ツングース語に（あるいはまた満州語も、か）、同語形が見いだせる蓋然性が高いことが、当然ながら考えられてくる。ツングース語の資料が手近に得られなかったが、幸い、nāという語形を得ることができたので、途中報告として示しておきたい（「Tung. nā 'stream, brook」＝朴 炳采「古代三国ui（の）地名語彙考」白山学会『韓国古代語wa（と）東北asia（アジア）』、白山資料院、2001・6、韓国、原文ハングル）。この語形については、現在、満州語も含め、調査・確認中である。

（この朴（2001・6）は、今夏の韓国での学会発表のための海外出張の折りに入手できた最新のものであり、[付記]に挙げた研究費によるものである。本研究は、広範な「南ユーラシア」地域の基本的な言語辞典・方言資料集・研究書が手元になければ継続不可能である。上の成果を報告して、研究費を認可下さっている関係機関に深謝申し上げる。）

【参考文献】（安部（2001.8.18）の参考文献も参照されたい）

安部清哉（2001・8・18）「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本学会（KAJA）第63回學術大會Proceedings』

安部清哉（2001予定）「方言地理学から見た日本語の成立——第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”——」『グロタータス神父記念論集 方言地理学の課題』明治書院

あべせいや（1997）『日本語のルーツを探ったら』アリス館

城野光一（1996）「アイヌ語地名に見られる古い層と新しい層」『言語学林1995－1996』三省堂

【付記】本研究は、次の研究費による研究成果の一部でもある。

- ① 日本学術振興会 平成13・14年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）「日本語の方言分布境界線（関越線・気候線）による方言の重層性に関する基礎的研究」（課題番号13610492、代表者：安部清哉）
- ② フェリス女学院大学共同研究費 平成13年度「東アジアにおける異文化接触と文化・言語・コミュニケーションの受容・変容に関する基礎的研究」（代表者：安部、120万円）

（本学教授）

図2-②参考 金田・(1964)

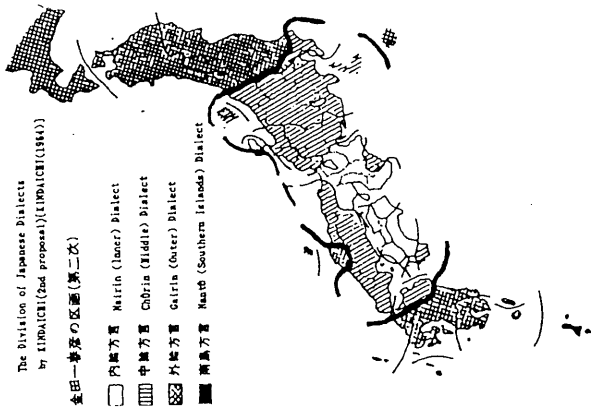


図2 日本語方言における「関東・越後線群」総合図
安部清成(1998) 南西諸島を除く西日本の番号は省略。
注：番号は本文参照。南西諸島を除く西日本の番号は省略。

図1 日本語方言の「中日本方言」分布



陳 正梓 (1982)

図 3

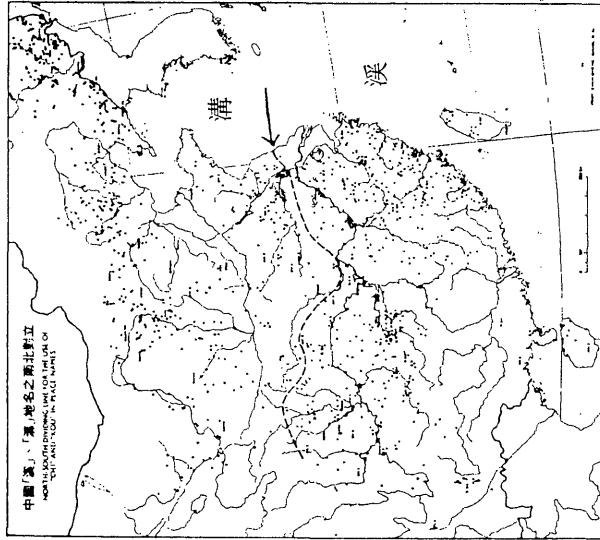


圖 29 中國「溪」、「溝」地名的南北對立

図 4-1-② 参考
中国の地方的風俗の分布 大村太良 (1986)

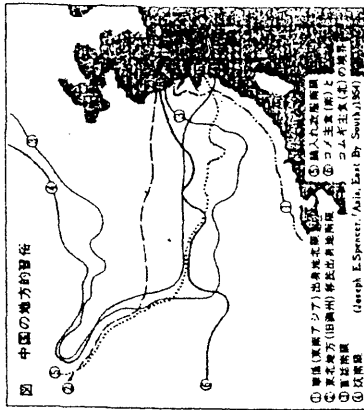


図 5
アジア・太平洋地域における地味名語 (方言) の分布と系図 安部 (1995)
— 中国における河川名「江/河」の分布 橋本高太郎 (1981) より —

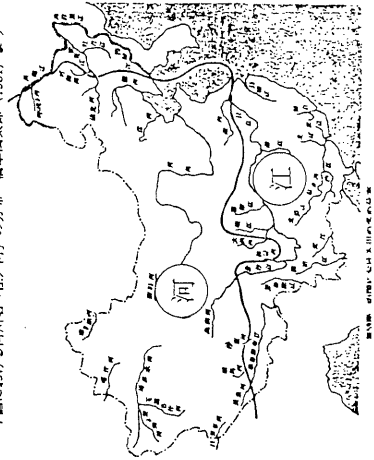
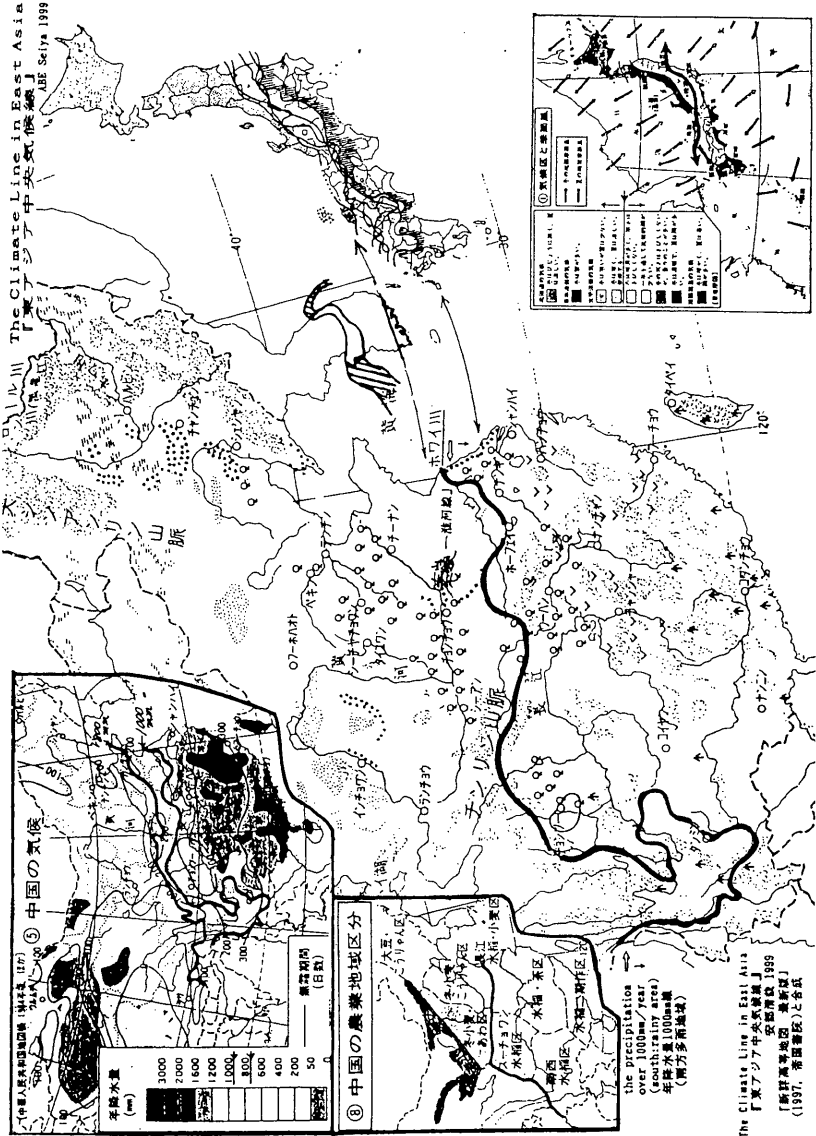
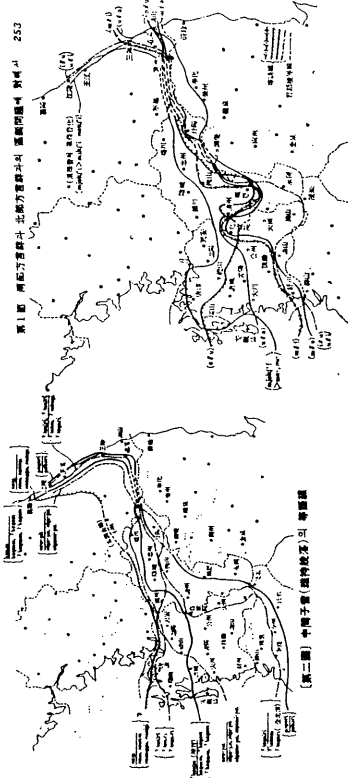


図4 東アジア中央気候線 安部 (1999) に朝鮮半島の気候線を加筆

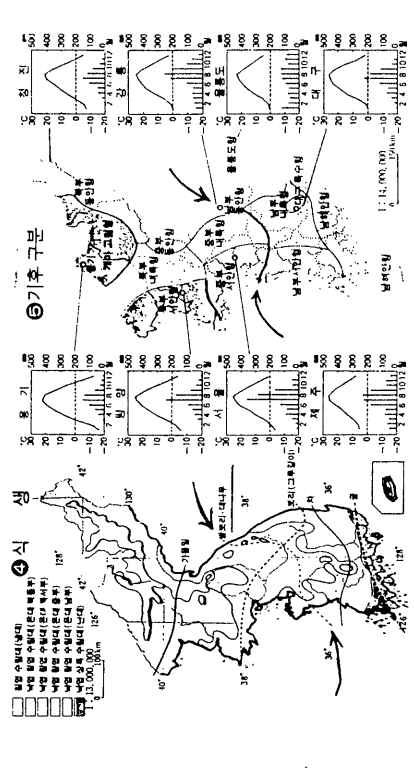


朝鮮半島の方言分布と気候区分



第1圖 南部分方言群と北部分方言群との區隔關係の示意圖

第2圖 中部方言群(國特級方言)の等氣線



④ 食

⑤ 기후 구분

韓國方言学会編『國語方言學』(1973)

図 6-② Monsoon Asia Area Yoshino(1999)

吉野 正敏(1999)

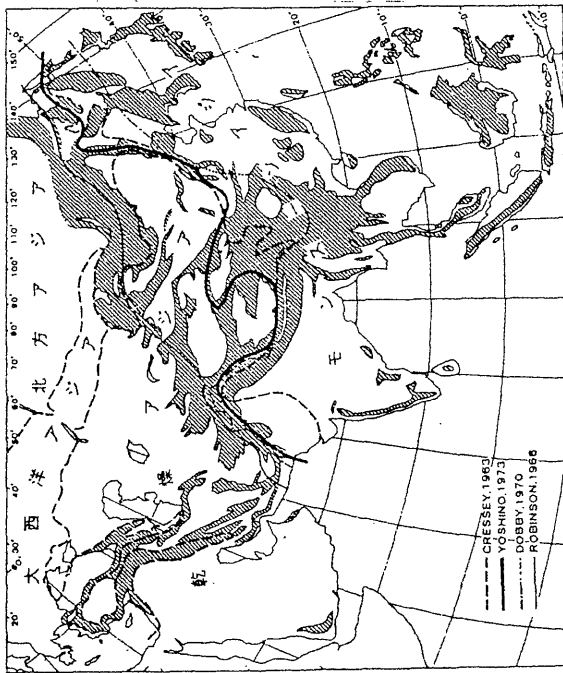
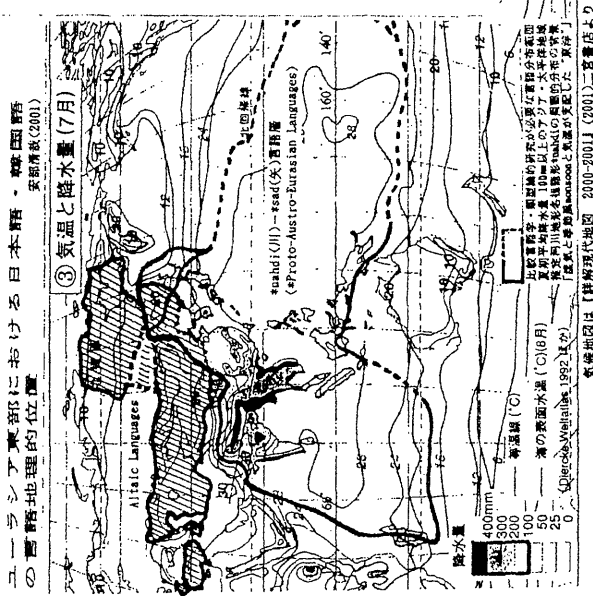


図 1 モンスーンアジアの範囲

Cressey (1963) の原図に、Robinson (1966), Dobby (1970), 吉野 (1973) による境界線を記入。図中の斜線の部分は山地。

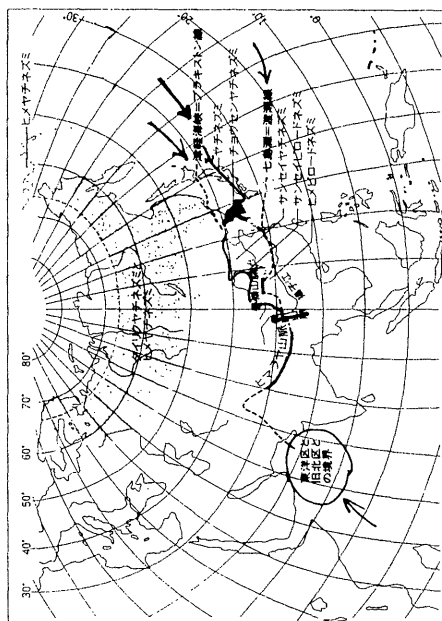
Fig. 1 Regions of Monsoon Asia delimited by Cressey (1963), Robinson (1966), Dobby(1970), and Yoshino (1973)

図 6-① 安部 (2000) にギリヤーク語を考慮して加筆



系集地図は『詳解現代地図 2000-2001』(2001)三省書店より

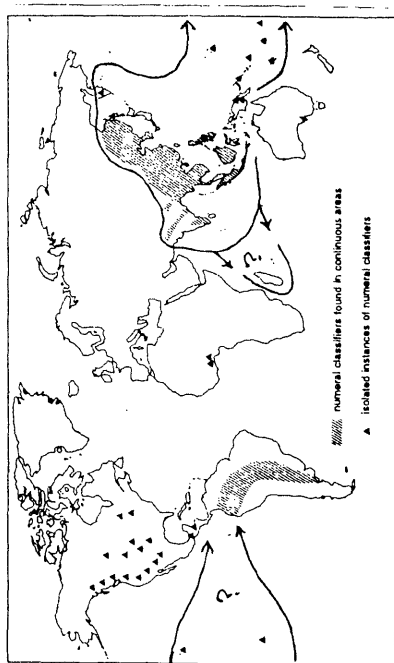
図8 (第10章・参考地図)
動物分布・東洋界と古北界（旧北界）の分布境界



日本動物大百科（平凡社）
に一部加筆

▲地理区と動物区系
ユーラシア大陸におけるヤチネズミ類、
ヒッコードネズミ類の地理的分布。
金子真也

図7 類別詞の世界的分布領域



Map 3. Distribution of numeral classifiers in the languages of the world Aikhenvald (2000) Classifiers